

性尿路造影により、造影剤の尿管外溢出が証明できれば容易である。今回、33歳女性で、子宮腔上部切断術後尿管腔瘻が疑われたが、上記検査では診断できず、 ^{99m}Tc -DTPA による腎シンチグラフィにて、左尿管下部から骨盤部に拡がる尿路外の放射活性が認められ、左尿管腔瘻と診断できた一例を経験したので報告した。なお、 ^{99m}Tc -HSA 膀胱内注入による膀胱シンチグラフィも行ったが、膀胱腔瘻は認めなかった。

座長のまとめ (19~21)

勝山 直文

(琉球大・放)

演題 19：胃に近い十二指腸などに狭窄があると RI が停滞し、メッケル憩室との鑑別が困難であることを示した興味ある一例であった。

演題 20：肝分葉が著明に腫大した一例で、肝分葉異常の文献的考察が行われた。

演題 21：X 線検査で尿管腔瘻の診断ができず、RI 検査で確診がついた一症例で、微量のものの測定やイメージングに RI が有用であることを示した。